

# 「紅葉、」を着る人

公任——頼実（六人党）——俊頼

高重久美

「秋夕風」に関して、「秋夕風」題で初めて歌を詠んだ「六人党」の源頼実と、そのことを強く意識していた源俊頼のことが思い浮かぶ。彼らは清新かつ印象群明な傾向の強い歌を詠んでいる。その理由として、頼実の場合には漢詩文を能くしたことも言えようが、俊頼との間に共通するのはむしろ、管絃者であった俊頼の父経信にも言える、音に対する敏感さ、聴覚の鋭さであり、それは頼実が資通、定頼、敦貞親王ら音楽の才に恵まれた管絃者を周辺に持つ芸術性豊かな環境にあったことが大きいことを、かつて述べたことがある。<sup>(1)</sup>

そして、その感覚の鋭さは聴覚にとどまらず、ものに感じる心の深さ、言語感覚の鋭敏さに通じていたであろうことも、頼実（一〇一五—一〇四四）が撰津源氏の人であり、その母は藤原南家の始祖実範のいとこに当たること、俊頼（一〇五五—一一二九？）の父経信（一〇一六—一〇九七）が『後拾遺集』撰者になり得なかったことを不審がられた程の当代一流の歌人であり、その母は公忠、信明の流れを汲む経信母の異母兄貞亮の女であったことから予想しうることであった。

撰津源氏の祖頼光の外祖父源俊は『後撰集』、父満仲と頼光自身は『拾遺集』の勅撰歌人であり、頼実の父である一男の頼国は殿上作文に「文

人」として登場（『御堂関白記』寛弘四年四月廿六日条）、頼実の同母妹は『狭衣物語』の作者と推測される六条斎院宣旨（一一〇一—一一〇九二？）であり、その周辺には、源頼光の女として遇された相模（九九二—一〇六一？）、その母（九七五？—？）と妻（一一〇三—一一〇九五）が頼光女である源資通（一一〇五—一一〇六）、資通の姻戚関係を通じての藤原定頼（九九五—一〇四五）、定頼の父公任（九九六—一〇四一）ら、多くの歌人がいた。また、俊頼の父経信は和漢の才を兼ね、詩歌の道に長じ管絃の芸を極めた朝家の重臣であり、その祖母は『経信母集』という家集を持ち、源国盛室である曾祖母は源致書女で、この一統にも、藤原重経・祐子内親王家小井・同紀伊・中納言女王・上総乳母等、『後拾遺集』入集歌人が多かった。

頼実と俊頼には、公任を始発点とする、長元八年冬大堰紅葉題歌会<sup>(2)</sup>で挙げた七首の内の頼実の一首（頼実・冬87）が内包する問題がある。「ちる紅葉、をきぬ人ぞなき」（公任139）という公任の表現を踏まえた、頼実の「もみちは」を「きて見る人の飽かずもあるかな」は、俊頼の「もみぢ葉をきてみる人のあまたあれば」へと継承されているのではないかというのである。二人のものに感じる心の深さ、言語感覚の鋭さは、公



任の「紅葉ゝをき」という表現の新鮮さに気づき、それを自身の歌として表現したところに現れていると思う。

本稿の出発点は、長元八年（一〇三五）大堰「紅葉」題歌会での頼実の歌が公任の歌と関係が深いことに気づいたことにある。

ほうりんしにまうて給ふ時、あらし山にて

朝朗嵐の山のさむければ ちる紅葉ゝをきぬ人ぞなき （公任139）

栖霞寺にて、もみちころもにをつといふたいを

もみちはゝわかころもてにかゝれとも きて見るひとのあかすもあるかな （頼実・冬87）

そこで、この頼実の歌と公任の歌を検証していった。その過程で、後代の俊頼の歌が頼実の歌を踏まえているように思われた。

九番 紅葉

左

源俊頼（朝臣）

もみぢ葉をきてみる人のあまたあれば主もさだめぬ衣手の森

（二八四 永久四年六月四日参議実行歌合17）

そして、この歌を端緒として、調べていくと、「秋夕風」に見るような、頼実と俊頼の歌の深い関係が明らかになってきたということなのである。

## 一 公任の歌

大堰川は、和歌や漢詩に詠まれた紅葉の名所である。今も十一月十日頃嵐山もみじ祭が行われる。

勅選集においてそれまでの大和国の竜田川・竜田山に代わって山城国の歌枕である大堰川・小倉山（大堰川右（南）岸）（今の嵐山）の紅葉が

登場するのは、寛弘二・三年（一〇〇五・六）頃成立の『拾遺集』からで、公任の歌も収録されている。

嵐の山のもとをまかりけるに、もみぢのいたくちり侍りければ

右衛門督公任

あさまだき嵐の山のさむければ紅葉の錦きぬ人ぞなき （秋210）

初二句に異同はあるが、公任の第四句「紅葉の錦」は三丹の才の故事を伝える『大鏡』も拾遺集歌に同じである。また公任の歌を伝える諸書の内、『大鏡』のみ初句が「をぐらやま」であるが、増田繁夫氏の説で納得される。

ひとゝせ、入道殿の、大井河に逍遙せさせ給しに、作文のふね・管

絃の舟・和哥のふねとわかたせ給て、そのみちにたへたる人くをのせさせ給しに、この大納言殿のまいりたまへるを、入道殿、「かの大納言、いづれのふねにかのらるべき」とのたまはすれば、「和哥のふねにのりはべらむ」とのたまひて、よみ給へるぞかし、

をぐらやまあらしのかぜのさむければ、もみぢのにしきゝぬ人ぞなき。

申うけたまへるひありてあそばしたりな。 （『大鏡』頼忠）

紅葉を錦と表現する「見立て」は『古今集』の頃からあり、

題しらず

竜田河もみぢみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

（古今・秋下283）

「錦を着る」、「錦」を「着る人」という表現も後述するようにこれ以前にもあったが、「紅葉の衣を着たのは何故かといえば、それは朝まだ早く、嵐の山の辺りは吹き下すあらしが肌寒いからだ」との理屈づけが新



鮮で、人々の好尚にあったのか、『後六々撰』(105)や『新時代不同歌合』(134)に公任の秀歌三首の内の一首として収められる。

公任の代表的名歌と認識されていたわけであるが、『後六々撰』は第四句「紅葉の錦」を「散るもみぢ葉を」とする。『後六々撰』と『新時代不同歌合』の撰んだ三首は同じ歌であるから、『新時代不同歌合』が『後六々撰』の第四句を変えて踏襲したと思われる。後述するが、公任の本来詠んだ第四句は家集や『拾遺抄』にある如く「散るもみぢ葉を」であつたろう。

この話が『袋草紙』『拾遺抄注』『十訓抄十』(151)『古今著聞集五』(110)『井蛙抄』(548)等にもあるのは、公任の歌が三舟の才の逸話と相俟って中世まで人々に喧伝されていたことを示しているよう。『袋草紙』を挙げるにとどめるが、これらすべて第四句は「散るもみぢ葉を」である。

御堂大堰河遊覧之時、詩歌之船分て各被乗堪能之人。而御堂被仰云、四條大納言何船可被乗哉。大納言云、可乗和歌之船。云云。此度ちる紅葉ばをきぬ人ぞなきとはよむ也。  
(『袋草紙』上 雑談)

## 二 頼実と公任

頼実が公任に関心を持ちうる機会は多様であつたと思われる。先ず、「六人党」の庇護者師房の父は具平親王(九六四—一〇〇九)であり、公任は母方の従兄弟に当たる。公任が『前十五番歌合』を撰した後に、人麻呂を高く評価する親王と貫之を重んずる公任が人麻呂貫之の優劣論を闘わせ、それが『三十六人撰』の成立動機になつたことが、匡房の『朗詠江註』を引いて『袋草紙』『後拾遺抄注』に語られる。『後拾遺抄注』で

は、第四句「紅葉の錦」が公任の本意でなく、「ちるもみぢばを」を花山院に対して主張した先の話の後にある。

長久末年(一〇四四)頃成立の『公任集』ではあるが、「六人党」の牽引力であつたと思われる頼実は、和歌に対する強い情熱を持っていた。頼実が公任の家集の草稿を公任男であり従姉の夫である定頼から見せてもらっていたであろう。そうでなくとも、公任の第四句を「散るもみぢ葉を」とする『拾遺抄』は既に長徳二・三年(九九六—七)頃成立している。

あらしの山のもとをまかりけるにもみぢのいたうちり侍りければ

右衛門督公任朝臣

あさまだきあらしの山のさむければちるもみぢばをきぬ人ぞなき

(拾遺抄・秋130)

また、長元八年(一〇三五)歌会の「紅葉落衣」「紅葉繞樹」「紅葉染水」「落葉満流」題の内「落葉繞樹」題の山寺に遊んで紅葉の散る情景を詠んだ家経・範永の歌が残っているが、その山寺が公任の歌と同じく法輪寺と思われるのも、頼実が公任の歌を踏まえていることの傍証となるう。

ほうりんしにまうて給ふ時、あらし山にて

朝朗嵐の山のさむければ ちる紅葉をきぬ人ぞなき (公任139)

落葉木にめぐり

もみちはみなこのもとにちりにけり いつれのかたをまつはひろはむ (範永72)

遊山寺詠葉落繞樹

かせをいたみもみちりしくこのもとに かへらむかたもわすられ



にけり

(家経3)

頼実が公任の「朝朗」歌に続く一四〇番の歌を念頭に置いて詠んでもいる。

イ冬のはしめつかたかむたちめ殿上人 大井にあそふといふ事を  
十月ついたち、殿上人 大井にいきたるに

なかれゆく  
落つもる紅葉をみれば大井河 ゐせきにとまる秋にそ有ける

(公任140)

ふゆ、十月一日、山さとに人くいきて、もみちを見て、かは  
らけとりて

もみちはのちりしのこれは山さとに あきをとめて見るこちする

(頼実・冬85)

「紅葉落衣」題歌の二番前の歌であるが、紅葉が残るだけでなく秋までも留まるという発想を公任から得たことは、「十月一日」と記した頼実の詞書が、正暦三年(九九二)頃の「十月ついたち」に詠まれた公任の歌を意識していると思えることから窺えよう。

公任の歌を踏まえて頼実が「紅葉落衣」題歌を詠んだことについて、「六人党」の庇護者であり頼実の主家であった師房の父具平親王は、公任の母方の従兄弟であったこと、長元八年大堰「紅葉」題歌会の「落葉繞樹」題歌中の山寺が公任の歌(公任139)と同じく法輪寺と思われること、頼実が公任集一四〇番を踏まえた歌(頼実・冬85)を詠んでいることなどを述べた。

長元八年の頼実の「紅葉落衣」題歌は、人々に落葉が付着したのを衣に見立てて、「紅葉の衣を着たのはなぜか、といえ」と詠う公任の影響を受けたと言ってもよからう。

頼実に影響を与えたと思われる公任の、「もみち葉を着る」という表現

は目新しい。紅葉を錦と見立てた「錦を着る」という表現には寛平后宮歌合歌や、その改作と思われる後撰歌及び好忠(好忠I 260)(好忠I 271)の先例があり、

(秋歌廿番)

右

そなほざりに秋の深山に入りぬれば錦のいろの衣ををこそ着れ

(五「寛平五年九月以前」皇太夫人班子女王歌合115)

なほざりに秋の山べをこえくればおらぬ錦をきぬ人ぞなき

(後撰・秋下403)

(古六帖・錦綾・にしき3518)(和一字1113)(袋草紙780)

「きぬ人そなき」という表現も後撰や好忠の歌を踏まえていよう。

しかし、「おらぬ錦」すなわち「紅葉の錦」という「見立て」を「ちる紅葉」という平明な表現として歌ったのは公任の創造であったと思われる。「公任集」一三九番に「ちる紅葉を」とあることや、第四句「ちるもみぢばを」を「紅葉の錦」に直すようにという花山院の仰せを、公任がしりぞけたという話が、『袋草紙』を殆めとして、『拾遺抄注』『後拾遺抄注』『三代集之間事』及び『十訓抄十』(151)『古今著聞集五』(110)に見えることから、その表現へのこだわりは窺えるであろう。そして、そのような公任像が長く清輔や顕昭・定家の中に留められていたことも。

捨遺撰之時、公任卿ちる紅葉をきぬ人ぞなきと云歌をば、花山院。紅葉の錦きぬ人ぞなきと直して、可入之由有勅定。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然之由被<sub>レ</sub>申ければ如<sub>レ</sub>本にてぞ被<sub>レ</sub>入けるに、近代之人諸事如<sub>レ</sub>此。

(『袋草紙』上 故撰集子細)

この話は、ここである「拾遺」が院が公任に命じて撰ばせたという長徳



二・三年（九九六～七）頃成立の『拾遺抄』のことであり、第四句「ちるもみぢばを」に不満であった院が後に自身で撰ばれた『拾遺集』（一〇五～六）において「紅葉の錦」として収められたという過程も推測させるが、第四句「紅葉の錦」が公任の本意でなく、「ちるもみぢばを」を花山院に対して主張した所に、初句を他撰で長久末年（一〇四四）頃成立の『公任集』の「朝ぼらけ」でなく「あさまだき」としているところに彼の志向が看取できよう。

『拾遺集』では増大している恋歌に『拾遺抄』との顕著な相違点が見られるが、公任がその選定によって歌壇的地位を不動のものとした『拾遺抄』では四季歌に比重が置かれている。そのことは清新な叙景歌を詠んだ六人党に通うものであろうし、紅葉の「錦きぬ人ぞなき」という『後撰集』の先例はあろうが、「ちるもみぢばをきぬ人ぞなき」という平明な詠風は彼の創造であることは先述した。

既掲の『公任集』一四〇番の歌は、およそ百年後『後拾遺集』（冬377）に入集し、それから二百五十余年後『風雅集』にも選ばれたが、特に山里詠が多く清新な自然詠に特色のみられる『風雅集』に再び取り上げられたことに注目したい。

十月一日、おほるにまかりてこれかれ歌よみけるに

前大納言公任

おちつもるもみぢばみれば大井川みせきにとまる秋にぞ有りける

（風雅・冬725）

公任は関白太政大臣頼忠の長男として誕生、長保三年（一〇〇一）権中納言・寛弘六年（一〇〇九）権大納言。万寿元年（一〇二四）官を退き、同三年出家し北山長谷に隠棲した。寛和兩度の内裏歌合に参加し、屏

風歌を詠み、多数の歌書を著した。三船の誉れ譚で見るように詩文や管絃にも優れ『和漢朗詠集』を編纂し、有職故実書『北山抄』も残した廷臣公卿であった。だが我々はそのことに捉われている気もする。彼の和歌を虚心に読めば、六人党に繋がる場所もあるのではないか。「堂上の文芸の極致というべき」公任の中に六人党の共感する部分があったと見ても良いのではなからうか。

『袋草紙』（68）は、範永が北山に隠棲する公任が絶賛した自詠の一首を、錦の袋に納めて家宝としたという、範永の公任への傾倒ぶりを窺わせる話を伝える。自然観照歌、客観的写景歌を試みようとした経信がまず学ぼうとした先人も藤原公任であったという。『袋草紙』（上 雑談）（下 判者骨法）は、長元八年（一〇三五）賀陽院水閣歌合左方講師の兄経長が、その出詠歌を公任に選歌してもらったために左方から長谷へ派遣されるのに、右方であった経信が兄に同行を願い出て、その歌評を聞いたと伝えている。

四に述べるように、六人党は経信と同時代を生きっており交渉を持っていた。右に見るように、範永が公任に傾倒し、経信もまた先人公任に学ぼうとしていることは、六人党に、そのような志向があったと考えて良からう。頼実の歌が山家田園等取材した清澄な叙景歌に特色があり、源経信がその影響を受けたことも以前触れたことがある。「藤原公任の美学と能因法師の数奇との、源経信における止揚」の系譜に確かに六人党は連なると思われる。むしろ、経信がその影響を受けた六人党こそ、「藤原公任の美学と能因法師の数奇」を止揚したと言えるのではなからうか。



### 三 頼実の「紅葉落衣」題歌と俊頼の歌

「ちる紅葉をきぬ人ぞなき」という公任の表現は頼実の「もみちは」を「きて見る人の飽かずもあるかな」を経て俊頼の「もみぢ葉をきてみる人のあまたあれば」へと継承されると推察される。

ほうりんしにまうて給ふ時、あらし山にて

朝朗嵐の山のさむければ ちる紅葉をきぬ人ぞなき (公任139)

栖霞寺にて、もみちころもにをつといふたいを

もみちは、わかこころもてにかゝれとも きて見るひとのあかすもあるかな (頼実・冬87)

九番 紅葉

左

源俊頼(朝臣)

もみぢ葉をきてみる人のあまたあれば主もさだめ衣手の森

(二八四 永久四年六月四日参議実行歌合17)

頼実の歌が公任の歌に関係が深いことは一見したところ明らかではないが、一度そう考えると、どこから見ても、「もみちは」を「きて見る人の飽かずもあるかな」(頼実)は「ちる紅葉をきぬ人ぞなき」(公任)を継承していると思える。頼実の歌は、公任の下の句の意を一句全体で言うおうとしているのであろう。

「錦を着る」、「錦」を「着る人」という表現は二でみたようにこれ以前にもあったが、頼実に影響を与えたと思われる公任の、「もみぢ葉を着る」という表現は目新しい。それを踏まえた上での、頼実の「もみちは」を「きて見る人の飽かずもあるかな」であり、それは公任の「ちる紅葉をきぬ人ぞなき」に対応して詠まれたものであろう。着る人の内面に視

点をあてた頼実の「きて見るひとのあかすもあるかな」は、「きぬ人ぞなき」を意識しており、そのバリエーションといえることができる。

そして、俊頼は頼実の「きて見る人」をそのまま踏襲し、公任の「嵐の山のさむければ」という理由づけの形も踏まえた上で、頼実の「飽かずもあるかな」の意を汲んで「あまたあれば」と詠んだ。「ちる紅葉をきぬ人ぞなき」(公任)——「もみちは」を「きて見る人の飽かずもあるかな」(頼実)を継承して、「もみぢ葉をきてみる人のあまたあれば」と詠んだ俊頼は、頼実の「衣手」も詠み込んでおり、明確に頼実の歌を意識していたであろう。

その「衣手」を「衣手の森」と歌枕にし、「衣手の森」を主体にして「主もさだめ衣手の森」と詠んだのは、俊頼の功績であろう。この歌枕は、「衣手」という名から紅葉を「衣」に見立ててその美しさを詠むことが多かったという。

俊頼が公任の歌論書『新撰髓脳』に学んで『俊頼髓脳』を著し、書中の長能の三月尽説話において、花山院邸を「四条大納言の家にて」とするような公任への関心の高さも考慮すれば、その向こうには公任の歌も見えていたであろう。実際、俊頼は公任の「嵐の山のさむければ」という理由づけの形を踏まえて「きてみる人のあまたあれば」と表現している。

二の『袋草紙』に貫之を重んずる公任像が記されていたが、橋本不美男氏によると、公任は紀貫之の歌観を継承発展させて、俊頼以下の後代歌人に多大の影響を与えたという。『八雲御抄』巻六の最後には、「公任卿は寛和の比より、天下無双の歌人として、すでに二百歳をへたり。在世の時いふに及ず、経信、俊頼已下、ちかくも俊成が在世までは、空の



月日のごとくにあふぐ。」と記されている。

「ちる紅葉ゝをきぬ人ぞなき」という公任の表現は、頼実の「もみぢは」を「きて見る人の飽かずもあるかな」を経て、俊頼の「もみぢ葉をきてみる人のあまたあれば」へと継承された。ここに、「もみぢ葉を着る」という表現を生み出した人、その表現の目新しさに気づき、感じ取り、その内面に視点をあてた人、そこに歌枕を用い、主体に新味を盛りこんだ人を見ることが出来る。そのように、ものに感じる心が深く、言語感覚が鋭く、和歌という言語芸術に真剣に立ち向かう人によって、秀歌が作られていくということを、公任―頼実（六人党）―俊頼という系譜にみる事ができよう。

#### 九番 紅葉

左

源俊頼（朝臣）

もみぢ葉をきてみる人のあまたあれば主もさだめぬ衣手の森

（二八四 永久四年六月四日参議実行歌合17）

源中納言雅定の家の歌合に、紅葉をよめる

紅葉ゝをきてみる人のあまたあれば ぬしもさためぬころもてのもり

（俊頼Ⅰ・秋55）

歌合と家集で、主催者の名が異なるが、雅定は紅葉題で俊頼と対した（18）ように、右方の出詠者の一人である。二十三歳の雅定が、主催者である実行と同じく、判者顕季の女婿である故の俊頼の誤認かと思われる。主健者・実行は永久四年（一一一二）のこの折り三十七歳、前年四月廿八日参議となったばかりで（『公卿補任』）、自家に歌合を催したのは今回が最初であった。この歌合は、顕輔・顕季室（経平女）実行室（顕季女）等詠歌しており、事実上は、判者顕季の一族によって運営されたものと

思われるが、出詠者には俊頼の他にも、仲実・道経・為忠等、練達の歌人が集っており、私的な催しとは言えない。ここで、俊頼が頼実の歌を踏まえて詠んだ背景を考えて見たい。

#### 四 頼実と経信・俊頼

俊頼の父経信は六人党と深い関わりを持っていた。先ず経信の歌人としての出発に影響を与えたと思われる叔父為善は「六人党」の指導者と目された能因と親しく（能因Ⅰ132・133）、能因はその死に対する感懷を詠んでいる（能因Ⅰ222）。また、為善は「六人党」が歌人として公に認められた感のある記念すべき歌合である長暦二年（一〇三八）九月十三日権大納言師房歌合に出詠している。この為善は経信母の同母弟だが、彼らの異母兄で、俊頼の外祖父でもある貞亮にも六人党との同座詠がある。

経信自身も永承五年（一〇五〇）に頼通（九九二―一〇七四）を迎え、珍しく棟仲（九九三？）も参加した師房邸での「対泉忘夏」「夏夜月」「待秋」題歌合（家経100・102）（範永21・40・70・71・72・173）（経信Ⅲ81・86・91）、天喜二年（一〇五四）の「月照水」題歌合（為仲Ⅰ50）（新古今・雑上1530）、後冷泉院御前での同五年「月前落花」題歌合（為仲Ⅰ83）（経信Ⅲ33・34）で、六人党の人々と歌を詠み合った。康平三年（一〇六〇）以降のある年には頼家等六人党の人々と訪れた源師賢（一〇三五―一〇八一）の梅津山庄で経信の代表作が生まれた。「経信は公任によって指示された理念にしたがい、六人党の歌人らの方法を採用し、晴の歌の詠法を完成したようだ。」とか、「六人党の歌は、山家田園等に取材した清澄な叙景歌に特色があり、涯経信はその影響を受けているという。」<sup>11</sup>な



どと語られる経信と六人党の関わりの具体的様相が捉えられたと思う。

なお、俊頼の歌と頼実の歌との深い繋がりの中には、頼実の歌とそれを踏まえて詠んだ経信の歌に窺われる、頼実と若き頃の経信との交流の深さが存在しており、それは、右に挙げた経信と六人党の関わりを示す例がすべて、後冷泉朝の永承以降のものであるのに比し、長元七・八年秋、長久二・三年（一〇四一・二）晩春のことと推測される、興趣を引く例なのだが、紙幅の都合で、以前触れた経信の代表作の例のみ挙げて後は割愛する。

師賢朝臣の梅津に人人まかりて、田家秋風といへる事をよめる

#### 大納言経信

夕されば門田の稲葉おとづれてあしのまろやに秋風ぞふく

（金葉初・秋253）

#### 山家早秋

秋たちて門田の稲もうちなびきをとめづらしき秋のはつ風

（頼実・秋33）

父経信と六人党の関わりの具体構様相を右に見た。俊頼自身も六人党の動向を熟知していたことは、その著『俊頼髓脳』に窺える。範永息清家と為仲・兼長と範永・兼綱と経衡・頼家と永胤という四組の六人党歌人とその周辺の連歌を収め、能因が兼房に同行した折伊勢の家の結び松を牛車を降りて通り過ぎた話と、藤原国行の陸奥下向時に「歌よみあつまりて、餞しけるに、」能因が歌を詠んだ白河の関は威儀を正して過ぎよと教えられ、又「この道を好まむとおぼさば、さやうにしてぞ、歌は詠まれ給はむ」（この道を心につけようと思われぬならば、それ程執着してはじめて、良い歌が詠まれるのであらうよ）とも言われたという話を挙

げて、能因と六人党周辺のお話を伝えた後、「されば、この道を好まむ人は、世の末なりとも、かしこまるべきなめり。」（従って、歌の道に心ざす人は、今の末世であっても、これらの能因の逸話を、謹んで拝聴しなければならぬのであらう。）と、結んでいる。

加えて、俊頼は、「落葉如雨」題歌<sup>13</sup>に見るように、六人党の発見した表現を使い、「花下日暮」「尋花日暮」「尋山花」「水上月」「夏夜月」「水風如秋」等六人党の使った歌題でよく歌を詠んでいる。

鴨長明の『無名抄』の長短約八十段ほどの歌論・歌話・歌人逸話中に「五月かつみ草事」「爲仲宮城野萩」「頼実數寄」という頼実・為仲に関する逸話が三段を占めるのも、長明の師である俊恵が父の俊頼から伝え聞いたことであらうから、俊頼の六人党に対する傾倒の深さを示しているよう。そのうち、「五月かつみ草事」「爲仲宮城野萩」の主人公が仲は、先に見たように、俊頼の父経信と同座詠を試みている。為仲が亡くなった時には俊頼は三十歳に達している。為仲と俊頼には交流もあったと思われる。

しかし、「頼実數寄」の頼実は、俊頼の長兄道時の生まれる前年に没している。その頼実の逸話が為仲と並んで『無名抄』中にあることは、俊頼が頼実に並々ならぬ関心を抱いていたことを示しているよう。

若き頃の経信が頼実と深い交友関係を持ち、頼実を尊重し、頼実の歌から多くを負っていることの詳細は、別の機会に述べるが、道時、基綱という兄達とは全く異なる、兄弟らしさをあまり感じさせない「俊頼」という命名のその「頼」という字も、経信の敬愛した頼実の名に拠るのではないだろうか。経信のみでなく、外祖父源貞亮にも六人党との交友は認められるが、より深く俊頼に頼実を意識させたのは、頼実弟頼仲と俊



頼長兄太宮亮道時との、経信を交えての交流を示す次の歌に見るような  
越後前司頼仲、山里に日ごろありて、太宮亮の許に、かく我が  
あれば、花見にも来ぬかなとやうにありし、返り事をしてとあ  
りしに

見せよかし風のけしきに山里の 門田の稲のなびくけしきを

(経信Ⅲ 101)

摂津源氏頼実の家と六条源家経信の家との関係であつたろう。

「ちる紅葉ゝをきぬ人ぞなき」(公任) — 「もみちは」を「きて見る人  
の飽かずもあるかな」(頼実) を継承して、「もみぢ葉をきてみる人のあ  
またあれば」と詠んだ俊頼は、頼実を尊重し、影響を受けた歌人であつ  
たと言えよう。そして、『詠歌一體』にみるように、頼実の歌から多くを  
負っている俊頼は、そこから彼独自の境地を確立したと推察される。そ  
のことを述べて、本稿の結びとしたい。

## 五 頼実の歌と俊頼の歌

俊頼の家集における「もみぢ葉<sup>は</sup>をきてみる人<sup>ひと</sup>のあまたあれば」の三番  
後の歌は、紅葉散る山里を詠んだ次の歌である。

障子の絵に、あれたる山里に紅葉ひまなく散りたる所をよめる  
故郷はちる紅葉ゝにうつもれて のきのしのふに秋風そふく

(俊頼Ⅰ・秋 560)

(中古六 37) (愚見抄 13) (桐火桶 160)

この俊頼の「故郷は」歌に頼実の影響を見るのは深読みすぎるであ  
ろうか。俊頼は頼実の二首の歌の文脈と用語を借用していると思われる。

頼実は、撰外歌であつたが「長暦二年九月十三夜、源大納言の家」の  
歌合の詠作をした。

風

よしの山もみちちるらし我やとの こすゑゆるきて秋風のふく

(頼実・秋 55)

「もみちちる」「あき風のふく」(頼実・秋 55)「ちる紅葉ゝ」「秋風そふ  
く」(俊頼Ⅰ・秋 560) は珍しい用語ではない。しかし、俊頼の歌を「ちる  
紅葉ゝ」にうつもれて「故郷は」「のきのしのふに秋風そふく」という文  
脈に置き換えて考えると、「もみちちる」らし「我やとの」「こすゑゆる  
きてあき風のふく」という頼実の歌の影響下にあると思われる。

頼実は、その三年後の「長久二年四月九日、於源大納言家有歌合事、」  
の撰外歌では、夏題の「水鶏」を詠んでいる。

くひな

ふるさとはとひくる人もなかりけり たゝくゝひなのおとはかりして

(頼実・夏 24)

一見したところ俊頼の歌と関連なさそうだが、頼実の「ふるさとは」を  
初句に持ってきて、訪れる人(「とひくる人」)のない(「なかりけり」)静  
寂の中で、音ばかりが聞こえていて(「おとはかりして」という文脈は、  
俊頼の「故郷は」散る紅葉の葉に埋もれてしまった(「ちる紅葉ゝにうつ  
もれて」)ように荒れ廃れた中で、(秋風が咲く)音ばかりが聞こえてい  
る(「秋風そふく」)に通じる。「故郷は」歌は頼実の「とひくる人もなか  
りけり」を汲んだ重層の文脈、二重写しにして提示しようとする表現で  
あろう。

旧里は僅かに昔を偲ぶよすがである軒のしのぶ草に聞こえるか聞こえ



ないかの秋風が吹いているばかりである（俊頼Ⅰ・秋560）という寂寥感と頼実のコツコツと何かを叩いているような水鶏の音ばかりが聞こえる（頼実・夏24）という静寂感は微妙に異なるが、俊頼は頼実の歌を意識していたと思われる。

俊頼自身のこの歌は、それによって山の紅葉の散る様を思い浮かべせ、眼前の秋風の吹く景を詠んだ頼実の歌（頼実・秋55）に加えて、訪れる人のない旧里は水鶏の音ばかりが聞こえるという静寂感を詠んだ頼実の歌（頼実・夏24）の文脈と用語を取って、眼前の旧里は散る紅葉葉に埋もれてしまって、軒のしのぶ草に聞こえるか聞こえないかの秋風が吹いているばかりであるという景を詠んだと思われる。

俊頼の歌（俊頼Ⅰ・冬593）が頼実の歌（後拾遺・絶五1145 頼実）を踏まえていることが古くから知られていた例として、定家息爲家の『詠歌一體』に記されている山里の歌がある。

日も暮れぬ人も帰りぬ山里は峯の嵐の音ばかりして

日暮るればあふ人もなしまさき散る峯の嵐の音ばかりして

奥は俊頼朝臣の歌なり。上手のしわざにしていますこしゆうくときこゆ。はしもよき歌とてこそ後拾遺には入りたるならめど、猶たゝまさきのかづらは心ひくすがた侍るにや。（詠歌一體27・28）

その歌や、頼実の「秋夕風」（頼実・秋73）題をも意識して生まれた先の秀歌（金葉初・秋253）に見る父経信以来の俊頼の「夕風」題（俊頼Ⅰ・秋372）へのこだわりは、俊頼の夕暮れや音や風の動きに対する格別な関心のありようを示しているよう。

頼実の二首を踏まえて詠んだと思われる俊頼の先の歌は、

障子の絵に、あれたる山里に紅葉ひまなく散りたる所をよめる

故郷はちる紅葉ゝにうつもれて のきのしのふに秋風そふく

（俊頼Ⅰ・秋560）

清輔の『続詞花集』（秋下272）に採られ、『新古今集』（秋下533）では有家と雅経によって撰ばれたが、後に定家も遣送本『近代秀歌』（7）で、『後鳥羽天皇御口傳』に「うるはしき姿なり。故土御門内府亭にて影供ありし時、釋阿は、これ程の哥たやすくいできがたと申しき。」とある次の歌と共に

堀川院御時、殿上の人く秋花をさくりてよませさせ給けるに、薄をとりてつかうまつれる

うつら鳴くまのゝ入江のはま風に お花なみよる秋の夕暮れ

（俊頼Ⅰ・秋414）

（金葉・秋239）

「これは幽玄に面影かすかにさびしきさまなり。」と評した一首であり、俊頼の達した境地を示していると思われる。

これは、定家の父俊成（一一一四―一二〇四）が俊頼を尊重したこと、よって然らしむるところのものであったろう。俊成は、基俊門下でありながら、歌人として基俊の好敵手俊頼を高く評価し、その撰になる『千載集』において、基俊二十七首に比し俊頼五十二首とおよそ二倍近く入集させ、『無名抄』の著者長明の師である俊恵とその父俊頼のことを語って、俊恵を俊頼にかなわないであろうとしている。

「俊成人道物語事」

五條三位入道 云、「俊恵は當世の上手也。されど俊頼には猶及び難し。俊頼は思ひ至らぬくまなく、一方ならずよめるが、力及ばぬ也。」（無名抄）



- (1) 拙稿「宇多源氏資通—歌人源頼実像が照射するもの—」大阪市立大学文学部創立五十周年記念国語国文学論集 (H11・6)
- (2) 拙稿「六人党」の生成と大堰紅葉題歌会『文学史研究』37号 (H8・12)
- (3) 増田繁夫「小倉山・嵐山異聞」『文学史研究』24号 (S58・12)
- (4) 源頼実無<sub>レ</sub>術執<sub>二</sub>此道<sub>一</sub>参<sub>二</sub>詣住吉<sub>一</sub>、秀歌一首令<sub>レ</sub>詠可<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>命之由祈請すと云々。其後於<sub>二</sub>西宮<sub>一</sub>、  
木葉散る宿は聞わく方ぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も  
と云歌は讀也。黨座不<sub>レ</sub>驚<sub>レ</sub>之。其後又参<sub>二</sub>詣住吉<sub>一</sub>、同祈請。夢示  
云、秀歌讀了。非<sub>二</sub>彼落葉歌<sub>一</sub>哉云々。其後秀逸之由謳歌。其身六位之時天亡云々。  
(『袋草紙』上 雑談)
- (5) 後藤祥子「源経信前史—道済集・公任集の読み—」『古典和歌論叢』明治書院S63・4
- (6) この話は、まだ「六人党」も結成されていなかった寛仁二年(一〇一八)頃のことなので、公任が出家するのはずっと後年であり、その点は誤りだが、六位藏人範永は藏人頭定頼の下僚であったので、定頼が部下の秀歌を父の公任に送るのはあり得る事であつたろう。
- (7) 藤平春男「解説」『歌論集』小学館S50・4
- (8) 註(5)に同じ
- (9) 「俊頼髓脳」頭注『歌論集』小学館S50・4
- (10) 上野理「七源経信と歌」(第三章後拾遺集の歌壇「後拾遺集前後」) 笠間書院S51・4

- (11) 竹下豊「新風への胎動」『和歌史—万葉から現代短歌まで—』和泉書院S60・4
- (12) 註(1)に同じ。
- (13) 拙稿「落葉」の音—源頼実の歌を通して—『文学史研究』39号 (H10・12)
- (14) 榊原本「あき秋のふく」(頼実・秋55)は、『私家集大成』「あき秋のふく」、『新編国歌大観』「あき風のふく」であるので、この郡分は『新編国歌大観』の「あき風のふく」を採った。
- (15) 註(1)に同じ。
- (16) 註(13)に同じ。
- (17) 「三位入道基俊成弟子事」  
五條三位入道談<sub>二</sub>云<sub>一</sub>、「そのかみ年廿五なりし時、基俊の弟子にならんとて、和泉の前司入道道經を媒にて、彼の人と車に相乗りて、基俊の家に行き向ひたる事有りき。彼の人、其時八十五也。其夜八月十五夜にてさへ有りしかば、亭主もことに興に入りて、哥の上句を云ふ。  
中の秋十日五日の月を見て  
とやうくしくながめ出られしかば、是を付く。  
君が宿にて君と明かさん  
と付けたるを、何の珍し氣もなきに、いみじう感ぜられき。さてのどかに物語りして、『久しく籠り居て、今の世の人の有様などともえ知り給へず。此比誰をか物知りたる人にはつかうまつりたるぞ』と問はれしかば、『九條大納言・中院大臣<sub>（注）</sub>などをこそは、心にくき人とは思ひて侍れ』と申ししかば、『あないとおし』とて、



膝を叩きて扇をなん高く使はれたりし。かやうに師弟の契りをば  
申したりしかど、よみ口に至りては、俊頼には及ぶべくもあらず。  
俊頼いとやむごとなき人なり」とぞ。

(無名抄)

本文の引用は、頼実の家集『故侍中左金吾家集』は榊原本(日本古典  
文学影印叢刊11『榊原本私家集(三)』貴重本刊行会S54・4)に拠るが、  
特に断らない場合は、私家集は『私家集大成』、勅撰集・私撰集は『新編  
国歌大観』、歌合は『平安朝歌合大成』、歌学書・物語・日記類は『新編  
国歌大観』五巻の底本に拠る。なお、私家集は私に漢字、濁点、句読点  
を施したところがある。

『御堂関白記』は、『大日本古記録』に拠る。

提示した歌の所収を示す( )内には、私家集は『私家集大成』、勅撰  
集その他は『新編国歌大観』に記す略称を用いた。